

足元から広がる新しい世界

古くから糸でモノを作り出ししてきたこの「河内」で、面白い靴下を作っている会社がある。阿保にある「コーマ株式会社」は、大正時代の創業以来、靴下を作り続けている。

「靴下を作っている」と聞いても、正直最初は、いまいちピンと来なかった。ただの靴下なら、どこでも売っているし、最近は海外で製造されている安価なものも多い。いったいどんなものなのか、社長の盛善さんに聞いてみた。

「足は左右非対称なのに、普通靴下って左右対称ですよね。伸縮性があって、それなりにみんな足にフィットします。それに今は、ナイロンのように安くて強い素材があるから、多くの人は、靴下なんかにはそれほどこだわりませんよね。値段もせいぜい一足数百円のものが多い。つまり、靴下はそれほど魅力のある商品じゃなくなっちゃったんですね。」

靴下を作る会社としては、主力素

材が綿から合成繊維へと変わり、安く製造できる海外に技術も資本も移ってしまったことは、大きな打撃があったようだ。しかし、そんな逆

ちよつとくらい高くついても、消費者の想像を超えた機能の靴下を作ってみて、こんなに面白い靴下を作ってみたから、使ってみませんか？

そんな問いかけをしたかったんです。」



生野高校「写真部」×広報まつばら

風を活かそうとする逆転の発想があった。

「消費者が求めるものをただ言われるままに受け身で作るんじゃなくて、

発にはかなりの時間と費用がかかる。そうだが、決して妥協をしない。

僕も試しに履いてみたのだが、足の形に合わせて編成してあるため

か、すごく足にフィットする。運動をしても無理に伸びることがないのでなかなか穴が開かず、長持ちするそう。

普段スポーツをするという人も、靴下にまでこだわるといふ人は少ないかもしれない。でも履いてみると違いがかなり実感できる。目立たないポジションにある靴下だが、そこにこだわってみると、新しい世界が広がるかもしれない。

最後に盛善さんに相棒は何かと尋ねてみた。「相棒は、皆で開発した靴下です。その靴下には、たくさんの人の技術や情熱が詰まっています。さらに、彼らを多くの人がサポートしています。すべてが相棒です。」

社員たちへの思いや、小さな所にも妥協せずにこだわる情熱。そういったところに「ものづくり」の真髄を垣間見ることができた。

文 杉浦健太郎（二年）



人間誰しも、大切な人・物・場所があるはず…。府立生野高校写真部の皆さんと一緒に、そんな誰かのかけがえのない「相棒」を紹介します。第26回目は、阿保で靴下の製造販売を手がける「コーマ株式会社」代表取締役社長の吉村盛善さんです。

※今回広報まつばらに載らなかった写真部が撮影した写真は市ホームページで見ることが出来ます。

